芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.24　49. 9

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米田貞一　編集人・矢野朔雄

広げることが高めることに

――県芸術祭10周年を顧みて――

佐藤義詮
県芸振会議顧問・別府大学長

早いもので大分県芸術祭は、本年で10回を数える。この行事の企画および審議の機関である大分県芸術振興会議が組織されたのは昭和39年である。

この芸振会議の発案については、今まで考えてもみなかったが、10年を回顧することは大切なことなので、この稿の執筆にあたって大分合同新聞の宮瀬さんに尋ねたところ、県の社会教育課にいた進、佐藤両氏が合同新聞に協力を求められ、その結果私なども招集されトキハで第1回の会合が持たれたのが、昭和39年12月26日ということである。

第2回県芸術祭・松方コレクション展
41年11月（写真大分合同新聞社提供）

芸術祭のことだけを考えると、芸振会議という組織が出来て、ここに出席した諸団体の意見で団体行事としての芸術祭が生まれたと理解しているが、その母体となった芸振会議からのイキサツを、この機会に明らかにしておきたい。

芸振会議については、私が会長として在任中しばしば意見が交された個人会員とか団体会員の問題を考えると、芸振会議それ自身もいろいろの課題を――たとえば松方コレクション展や、美術館博物館などの建設促進とか――持っていたわけでこれは出来るだけ多くの理解者を必要としていた。

10年前の県下の事情は、大分県が新産都という指定をうけて工業化の傾向が著しく、かたや国体の誘致があってあげてスポーツマンの養成という空気の中で、芸振の誕生はそれに対抗する文化活動としての意義が深かった。

しかし宮瀬さんの話から想像するのであるが、この芸振会議の創立も当時の社会教育課長であった鷲尾さんが、芸術祭を企画するための伏線として企画されたものではないかと思われる。

このことは別として、始めの頃の芸振会議に出席した個人としての会員の発言に私は若干の責任を感ずると同時に、職業的芸術人の少ない地方においては、――芸振会議の本来の方向を明らかにし、芸術祭に参加の各団体も十分の実力を発揮できるに至った今日では、その主催は新しい視野から考慮されてもいいのではないかと思う。

このことは中央で行われる芸術祭のようなプロ団体のミニ化であっても差支えないし、文化運動の方向は現在九州沖縄文化協会の傘下にある各県の活動がその参考になろう。文化は裾野を広げることがそれを高めることにも連なる。

〈県芸振会議・県芸術祭の〝あの頃あの時〟〉

39年、40年県芸振会議の発足当時

39年の12月26日に〝文化活動を盛んにするにはどうしたらよいか〟というテーマで文化団体の代表者や学識経験者が約30人集まって会議を開いた。

参加者は、当時の溝辺県美協委員長、糸井県写協委員長、山口県書協事務局長、辻県歌人クラブ事務局長、木村県民文化会議事務局長ら文化関係者はじめ、佐藤別府大学長、岩田岩田学園理事長、布施県立大分図書館長や、竹田、臼杵、別府などからも県文化関係者が集まり、平子大分合同新聞事業部長（現別府支社長）の司会で討議された。その結果、〝文化活動を盛んにするには各文化団体が横の連絡を密接にとり大分県芸術祭を開くことが最も望ましい〟という結論を得た。なお、この会議を大分県芸術文化振興会議（仮称）とし、翌年から芸振会議の名で芸術祭を開くことを決議した。

芸術祭の具体的内容については翌（40年）1月初めに第二回の会議を開き、討議することになったが、芸術祭という試みは大分県では初めてのことであり、当時の新聞では「各文化団体とも非常に乗り気であった」と書かれている。

またその年の文化欄展望12月30日付大分合同には「ことしは文化団体や文化活動者の横の連絡をとろうとする動きが活発だった」とし、次のことが書かれている。「6月に発足した文化会館建設期成会がまずその端的な現われだった。〝文化会館がほしい〟という共通の願いをもとに、県美協、大分労音、県民文化会議が中心になって県内各団体に呼びかけてできた組織で、参加者参加団体は県下では珍しく幅広いものだった。

期成会の結成が刺激になり、大分市が文化会館を旧県庁跡に来年から着工することを決めたことはことしの第一の朗報であろう。ただ年が押しせまった26日、文化団体関係者が集まって大分県芸術文化振

県文化界の夜明け

仲　町　謙　吉

県芸振会議理事・県美協事務局長

昭和40年代は大分県の各文化団体にとって画期的年代である。大分県芸術文化振興会議の発足、第1回芸術祭の開催、と文化団体の大同団結の年代である。

大分県美術協会でも、日・洋・彫・工部、書道部、写真部の三者統合の年であり、統合記念として大分県美術協会20年展の開催、第1回県美展といずれも大分県芸術祭参加で開催している。41年には大分県芸術文化振興会議は、大分文化会館の完成記念の一環として、松方コレクション展を県芸術祭の主催行事として開催、この時県芸術文化振興会議の主唱で大分県立美術博物館建設期成会が発足、現在の大分県芸術会館建設と総合博物館（仮称）の建設気運を大きく盛り上げる原動力となった等、40年の年あけと共に文化団体は大きく躍動を始めた。

これは大分県芸術文化振興会議の発足、大分県芸術祭の開催が大きな力となったことは事実であり、またその成果であると思うが、当時としては、各文化団体とも、それぞれの立場から疑惑の目でみていた。大分県芸術文化振興会議がその組織づくりに文化団体の〝長〟ばかりで組織し、支える会員がなく頭だけの会でその趣旨が徹底しなかった。また県芸術祭の運営委員が各団体の事務局長クラスで組立てられていたが、各団体にとっても組織的な確立度もまちまちで、行政的思わくが印象的に強く働き、中にはむしろ反対的立場のものも多かった。

一方文化団体にとっては、横のつながりがなく話しあう場がなかったことも事実で、各団体ともその組織や性格もわからず、意志疎通の場を求めていたことから、懇談会的な芸術文化振興会議の設立は意義があった。しかし県芸術祭では、既に活動してきている団体にとっては、芸術祭に参加する、しないにかかわらず事実催していることで、かえってわずらわしいことで何の意味もないように思われていた。更に大分県芸術文化振興会議は、表面的、対外的には各文化団体の総合的性格を持ち、文化団体の代表的存在であるように見え、事業予算的には各文化団

興会議が初めて開かれ、同会議の名で来年から大分県芸術祭を開くことを決議したのも注目される」とある。

翌昭和40年は第一回の芸術祭がいよいよ開かれることになったが、同時に大分市文化会館の着工という奇しき因縁の年になった。

さて、第二回の大分県芸術文化振興会議は40年の2月11日、トキハ第2特別室で開かれた。この会議の主な内容は芸術祭の開催期日、県芸振会議の運営組織、大分文化会館（仮称）についての三項目で、会議には県美協、県写協、県舞協、県民文化会議など、文化団体はじめ官庁関係者など約20人が集まり熱心な討議がされた。

まず芸術祭の開催については県の予算案にも新規事業として認められており、具体的には10月11月の二か月間大分、別府両市を中心に開くことが決まった。部門は、美術、音楽、演劇、民俗芸能、舞踊その他と、おおまかに決めた。なお、県芸術祭運営協議会と実行委員会を設けて具体的に決めていくとし、協議会や実行委員会のメンバーは次期会議にまわすことになった。

ただ芸振会議のあり方については、問題があるごとに招集して意見を出し合う懇談会でよいという意見と、文化団体の横の連絡機関として組織化すべきだという二つの意見が出ているが、この点についても次の会議までにメンバーをハッキリ決めて組織化することにした。

文化会館問題については辛島大分市秘書課長から建設計画をきき、「建設に際しては使用者側の意見をぜひいれてほしい」と要望した。

次は5月17日に第三回の会議を県立図書館で開き役員を内定した。役員選考委員会には米田県立大分図書館長、溝辺県美協会長、鷲尾県社会教育課長、平子大分合同事業部長らが集まって審議し、会長1、副会長3、のほか監事2、理事15、の人選もあわせて行ったが、監事、理事については総会の席上、会長が指名して承認を得ることになった。

その後総会によって決定した役員は次のとおり。

会　長　○ 佐藤　義詮（別府大学長）
副会長　○ 河野　　彰（眼　科　医）
〃　　藤沼　　恵（ウイステリアコール主宰）
〃　　溝辺　有巣（県美協会長）
監　事　　佐々木憲一（県児童文化研究会長）

体と並列でありこんな矛盾からの性格のあいまいさと、県首脳部の文化行政に対する関心度や、熱意からみて（当時は社会教育課の中の一つの文化係であった）予算の大幅増大化は望めそうもなかった。こんな追い詰められた気持から、既に県より事業補助を受け事業を催し続けているような、大分県美術協会会員等にとってはその疑惑をぬぐい去ることはできなかった。

一部の者の思いあがりと県行政の結託であるかの印象さえ話題となる始末であった。自己中心的な考えがややもすると中心となる文化団体にとって、また純粋性がその信条である文化団体の性格がもたらすものへの40年代は、別な角度からの新時代とも言える。また大分県芸術文化振興会議の発足、県芸術祭への点火とも考えられる。

[redacted]

第1回県芸術祭記念音楽会

40年10月9日午後2時から別府国際観光会館ホールで開かれ、声楽家立川清登氏（大分市出身）の特別出演や200人の合同大合唱、オーケストラ演奏など多彩なプログラムをくりひろげ約2,500人の聴衆を音楽の世界に引き入れた。

（写真はフィナーレ、立川氏指導で全員「荒城の月」をうたう。大分合同新聞社提供）

監　事　○ 平瀬　克美（県洋舞踊協会長）
理　事　　糸井　英雄（県写真作家協会長）
〃　　稲浦　竜一（県高文連会長）
〃　○ 岩田　　正（岩田学園理事長）
〃　　加藤真一郎（大分合同新聞業務部局長）
〃　　金田　剛平（臼杵史談会長）
〃　○ 木村　成敏（県民文化会議長代理）
〃　　小林　威一（大分銀行業務取締役）
〃　○ 園田　喜平（大分市教委社会教育課長）
〃　○ 辻　　英武（県歌人クラブ事務局長）
〃　　平田　暘郁（県書道協会委員長）
〃　　藤間小伊松（県日本舞踊連盟会長）
〃　　堀　　七衛（裏千家淡交会大分支部長）
〃　○ 米田　貞一（県立図書館長）
〃　　渡辺　澄夫（大分大学教授）
事務局長　鷲尾　正昭（県教委社会教育課長）

※カッコ内は当時の関係役職名、○印は現在も引きつづき県芸振会議役員として県文化界のために努力されている方々。

第1回県芸術祭記念音楽会

「森の歌」を全曲合唱

宮　瀬　香多士

県芸振会議理事・大分合同新聞文化部長

県芸術祭もことしで10周年。早いものである。この間九回、開幕行事が行われたことになるが、私の脳裏に深くやきついているのは、なんといっても第一回のことである。

昭和41年…、当時はまだ大分文化会館が出来ていなかったので、第一回芸術祭の開幕行事は、別府の国際観光会館ホールで開かれた。準備期間も短かったので、最近のように開幕行事としての大がかりな催しなど出来ない寄せ集めの感をまぬがれぬものだった。関係者の間でも「学芸会的にならぬように…」ということで、いろいろと工夫がこらされていた。声楽家の立川清登さんに特別出演を願ったのも〝開幕〟を、より華やかにし、実のあるものにするためのものであった。

開幕記念音楽会当日のもようを紹介すると――

まず大分交響楽団の「ロザムンデ序曲」の演奏で

協和する心のすばらしさ

平　瀬　克　美

県芸振会議監事・県洋舞踊協会長

芸術祭がはじまって10年、ことしはその開幕行事として県民バレエ「朝日長者」が公演される。

当初は「参加する団体があるだろうか」という不安なことばさえ聞かれたほどだった。大分県舞踊協会は別府市国際観光会館で合同公演（各研究所がそれぞれ作品を持ちよって合同して一つの公演をする）を開催した。その後地方文化の向上と舞踊を志す者の交流を考えて地方で会を持ち芸術祭には毎年参加してきた。（第２回／中津市福沢会館、第３回／大分文化会館、第４回／日田市民会館、第５回／竹田市公会堂、第６回／大分文化会館）そして第７回芸術祭の時、県民バレエ「白鳥の湖」を協会主催として参加し、開幕行事公演として取りあげられた。このことは私どもにとってなつかしい思い出ばかりが残っている。公演する決意をしたあとで何度も止めた方がよいのではないか？と思った。「洋舞踊協会があんなことを計画してもできるものか」という世評も耳にした。つぎつぎに起こる難問題に向って、協会としてはまっすぐな道を歩くことを主軸にし、会員一同真剣に話し合って解決していった。苦しかった。しかしいよいよ幕が開き、刻々と舞台が進行し拍手に送られて最後の幕が降りた時は、舞台の袖で私共は目がしらを押え、手と手を握り合って感激

豆知識

芸術祭　詳しくは文部省芸術祭。演劇をはじめ、音楽、舞踊、演芸、映画、放送、レコードなどの諸部門にわたり、各芸術の向上発展と普及浸透とを図るため、昭和21年以来、毎年文化の日を中心とする秋を期して文部省の委嘱する芸術祭執行委員の手によって行なわれる各種の催しの総称。

芸術選奨　文学、演劇、美術、音楽、舞踊、映画、古典芸術、放送、大衆芸能、評論その他の分野で、一年間すぐれた業績をあげたり、新境地を開いた人に文部省が文部大臣賞を授賞するもの。創設は昭和25年。昭和22年から24年までは芸術祭参加者を対象としたが、25年からは文学も対象とされるようになり、賞金10万円。文学は第１回(25年)は竹山道雄「ビルマの竪琴」、石井桃子「ノンちゃん雲に乗る」。第21回(45年)は石原慎太郎「化石の森」。

幕が上がり、舞台は暗転、ロウソクの灯を手にした長野美智子さん（劇団「青空」）が大分県芸術祭をたたえる詩「火の鳥」（加藤真一郎氏作）の朗読をした。いささか凝った趣向だった。

音楽会は小、中、高、大学生の合唱やブラス演奏オーケストラ演奏のあと、大分市出身の声楽家・平尾頌子さんと立川清登さんの独唱。立川さんは「ノミの歌」や「闘牛士の歌」などを表情たっぷりに歌い、会を盛り上げた。最後は藤沼恵さんの指揮で「森の歌」の全曲大合唱、引きつづき立川さんのおんどで聴衆と舞台とで「荒城の月」の斉唱をして四時間にわたる記念音楽会を終わった。

関係者は開幕の寸前まで「はずかしくないだけの聴衆が集まるだろうか」という心配をしていたが、約二千五百人という数字は上出来だったといえよう。

第一回県芸術祭が終わって、反省と今後のあり方をさぐる座談会をやったが、開幕記念音楽会については「森の歌」の大合唱が好評だった。もちろん出演者の努力のたまものだが、当時の県社会教育課長・鷲尾正昭さん（現総理府青少年対策本部参事官）の熱意も見のがせまい。大合唱の練習は夜、大分市の荷揚町小学校でやっていたが、鷲尾さんと文化係長の進恒夫さん(現碩信高校生徒部長)は、練習日には必ずといってよいほど会場に来て練習を見守っていた。

練習何日目だったか覚えていないが、あるとき「森の歌」は全曲やるか、抜すいでやるかということが数人の関係者で話し合われた。場所は荷揚町小の校長室。講堂からは練習の歌声が響いていた。鷲尾さんを除いて、他は「全曲は練習期間からみてもムリだろう」という意見だった。だが鷲尾さんは「ぜひ全曲やっていただきたい」と熱心に主張した。みんな鷲尾さんの熱意に負けた形で「藤沼さんがOKなら全曲にしますか」ということになった。

このとき鷲尾さんがいなかったら「森の歌」は抜すい曲として演奏されていただろう。全曲演奏と抜すい曲では大違いだ。全曲やってはじめて県芸術祭の開幕記念音楽会だ…という感を深くしたものだ。

10周年ともなると第一回のことを知る人も少なくなったが、スタート時の苦悩をふり返ってみるのも何らかのプラスになるのではなかろうかと思ったりしている。

[redacted]

したものである。このことが今もなおはっきりと残り今度の公演、県民バレエ「朝日長者」を計画するきっかけとなった。

再び県民バレエ「朝日長者」に取りくみながら「白鳥の湖」以上に私共は固く結ばれ、多くの方々のご協力を得ている。これらの方々のご厚意に対してもまた、洋舞踊協会を見守る方々に対してもご期待に添えるようがんばらなければならないと思っている。

[redacted]

第７回県芸術祭・県民バレエ「白鳥の湖」第２幕

46年10月１日大分文化会館大ホール(写真大分合同新聞社提供)

第1回の思い出

藤沼先生の情熱

加　藤　公　康
県交響楽団指揮者・大分大学助教授

第一回芸術祭の開幕行事の圧巻は「森の歌」の大合唱であった。別府観光会館ホールのステージ一杯に並んだ二百人の大合唱は、この音楽会の最後をしめくくるにふさわしい華やかさと盛り上りをみせた。同時にこれからの大分県の芸術文化を振興していこうとする第一回の芸術祭のふん囲気を象徴するかのように、誇らしくも高らかに響きわたった。だが、当時まだまだ低調な県下の音楽活動の中で、一般の人々を結集して短期間にあれだけの成果を上げ得た裏には、関係者の並々ならぬ苦労と努力があった事と思われる。

「森の歌」は現代ソ連の作曲家ショスタコヴィッチの名作であり、なかなかの大曲。敢えてこの曲を取り上げ、その実現を可能にしたのは当時の社会教育課長の鷲尾さんの強力な力添えと、上野ケ丘高校で過去に全曲演奏の経験をもつ指揮者の藤沼恵先生のすばらしい情熱だろう。

練習会場の荷揚町小学校の体育館に私も時々お邪魔してその練習をきかせていただいた。実際の練習に入ったのはすでに夏の終り頃で、週三回の強行スケジュールだったように思う。いつも会場の近くまで来ると、夜のしじまを破って歌声がきこえてくる。その歌声が中断すると、演奏上の注意をされたり、更に模範歌唱をされる藤沼先生の若々しく、ボリュームのある声が会場の外まできこえていたのが、今でも耳に残っている。

先生の主宰するウィステリアコールのような単独の合唱団と異なって、寄せ集めの団体であれば、なるほど人数だけは多くても各人の質のばらつきもあるし練習もあまり能率的にはいかない。事実、本番まであまり日数のない時点でも全七曲のうち半分ぐらいしか練習ができていなかったのではなかろうか。うかつにも私は、とても全曲演奏は無理で、できただけの抜粋演奏ぐらいに考えていた。しかし結局あのように見事に全曲を演奏できたのは、ひとえに藤沼先生の執念にも似た情熱の賜と敬服の他はない。終曲「栄光」の「我等の祖国我等たたえよや。ああ

＜アンケート＞　10年間をふりかえって

① この10年間、県芸振会議および県芸術祭の行事、運動などで印象に残っていることは？
② 印象に残っているその理由は？
③ これからの県芸振会議や県芸術祭に望むこと、またはやってみたいこと。
④ 「芸振」24号をかりて皆さんに知らせたいこと。

参加不能地区の悩み③芸術祭該当期間を10月から11月と限定することなく、多少の幅を持たせ、弾力的な余裕のある配慮が望ましい。その理由は宇佐市の場合、年間の文化行事の過半数が12月に集中しているので毎年参加できない。④「宇佐市農業文化祭」の諸行事が12月初中旬に盛大に挙行されることを具体的にＰＲしたい。俗説〝お取越し〟協賛のお祭りです。

（宇佐市文化協会事務局長／末永蒼人）

①～②本年度福田、生野両先生回顧展が開催されることは、まことに10周年を飾るにふさわしい圧巻である。それにつけても祥雲斎先生ご存命中（46年度主催行事として）回顧展を計画し、二転三転のあげく先生の健康上の理由で中止になったことを思い起こすと、感無量のものがある。高松・三笠宮家や文化庁から秘蔵の作品をお借りすることを快諾されていたため、中止となった事情説明やお詫びのため夏の暑いときに急きょ上京した辛い思い出もある。それだけに本年度福田先生の作品とジョイントで展示されることに成功したことはほんとに嬉しい。③県民ものの継続、特に県民大合唱団、オーケスト

豆知識

芸術院賞　日本芸術院（高橋誠一郎院長）が昭和22年に設けた賞。すぐれた芸術作品や芸術の進歩にいちじるしく貢献した人に贈られる。第１部（美術）、第２部（文芸）、第３部（音楽、演劇、舞踊）の３部門に分かれている。第27回（45年度）の文芸部門では富安風生（俳句）、唐木順三（評論）が受賞した。受賞者には賞状、賞金（30万円）が贈られる。院賞受賞者の中から選ばれる恩賜賞（24年創設）は３部門とも45年度は該当者なし。

！」の歌詞が高らかに歌い終った瞬間、会場の割れるような拍手が起こった。その鳴り止まぬ拍手のアンコールの中で、当日特別出演されていた立川清澄さんが、藤沼先生の労をねぎらうように固い握手を交わしたのが印象的だった。

あれから10年。その藤沼先生も今はもう故人となった。その後県下の音楽活動もずいぶん活発になってきたが、これもこうしたすぐれた先人の情熱が刺激となり、その業績が今日に到っている事は間違いない。[redacted]

第４回県芸術祭初の県民オペラ「フィガロの結婚」第２幕

43年10月１日大分文化会館大ホール（写真大分合同新聞社提供）

ラによる「第九」の実現。

（県教育センター所長・元県文化室長/田村卓夫）

①松方コレクション展、大分県美術百年展、バレエ「白鳥の湖」、オペラ「吉四六昇天」、美術、博物館建設期成会結成とその運動。②松方展、百年展はこれまで県民が接し得なかったもので、画期的な企画でした。バレエ、オペラは地域のメンバーの努力の結晶であり、美術、博物館運動は必然的な文化、芸術に対する地域社会の要求です。③芸振を中心とした行事、活動（芸術祭各種の講座、展覧会など）が県下の各郡市の特色とタイアップして活動をしていくことを考えてみたいと思います。（現在もやってはいますが、ユニークなものが少ない）④自由律の俳句「くさ句信」を出しています。自由律の俳句に接してみたいとお考えの方はご照会ください。

（「くさの会」幹事／藤原嘉久）

①演劇部門の発表の機会ができ、集中行事でとりあげられたこと。②アマチュア演劇として認められたこと、自立演劇、青年演劇、高校演劇、専門演劇の四部門が一同に会して県民にアピールできたのは最大の収穫である。③芸振会議が県民の地域文化の向上をはかるためには中心部（大分、別府）だけのものでなく可能な限り施設、設備の関係を考慮して３年に１回ぐらい地方でやってはいかが？④高校演劇の発表コンクールが本年で第27回目で、別府市中央公民館にて11月20日から22日まで３日間高文連加盟高校25～26校の参加で上演されるので観劇にご来場を乞う。

（県高校文化連盟理事演劇部長／尾立卓道）

①昨年度（９回）からの開、閉幕行事は画期的で芸術祭そのものをしめる意味では大変効果があった。②何といっても大分のオリジナルを創りあげたことである。スタッフも各ジャンルからの賛助構成がみられ、将来への明るいものを感じた。③・一般的に芸術の秋を指すのは９月からである。したがってロングランになるようだが、期間を９、10、11月の３か月にした方が参加行事数が増える。・メイン行事に舞台ものが圧到的だが、美術団体を軸にした新企画を打ち出してはどうだろうか。

（県宣伝美術協会長／波多野義孝）

一六世紀の戦国大名大友宗麟の丹生島築城と南蛮文化の輸入により、臼杵はこの時に文化都市としてのスタートを切った。その後藩制時代に歴代藩主の文化的善政に加えて有識者の中央文化人との接触……門人の育成と、その母胎となる色々な要素が健全な姿で芽生え、今日の市民文化の基盤をつくってきた。

ちなみに江戸時代より昭和の現在まで当市より輩出せる画人は実に四〇名（日本画・洋画も含め）にして、この他作家、名匠、名僧等々と加えるとかなりの数に驚かされるほど文化的プライドは他市に誇り得るものがある。

現在、市の文化団体が加盟している臼杵市文化連盟は実に一三団体を有し、毎年一一月三日文化の日を中心として華々しく開催される「臼杵市秋の文化祭」は公民館大ホールおよび市国民年金会館等を中心会場として約一か月間にわたり市民文化向上のため毎年多数の参観者を魅きつけている。

波紋

臼杵市に文化会館を

高橋　正
臼杵市文化連盟事務局長

しかし加盟団体の増加と各会の発表会場については、毎年の理事会の席上で必ずといっていい問題点にふくれ上がってきた。まず現在の市公民館は収容力を筆頭に、採光、音響、換気等々の面で余りにも貧弱になってきたことである。音楽会や演奏会には反響し、美術展には採光が悪く、講演会には折りたたみ椅子の老朽と、雑音が高く、夏は暑く、冬はセメントの床からの寒気は身にこたえ、駐車場のスペースがなく等々と改善すべき多くの難問題山積である。

美術・音楽・人形劇・詩吟・生花・短歌会・句会・史談会…と様々な団体が何らかの形で自由に発表される新しい、素晴らしい会場がほしいものである。しかし実現までにはまだまだ相当な時間と、それにも増して市民一人一人の情熱に待たねばならぬ。こう思案している昨今である。

[redacted]

10年間の県芸術祭行事　アンケートから――

トップが「吉四六昇天」
2位・松方コレクション展

(1)『この10年間の県芸術祭の行事について印象に残っているものに○印をつけてください。』（無差別、50人にお願いした。大分市が29人、別府市11人、臼杵市、大野郡各３人、大分郡、速見郡各２人。その中で男21人、女29人、公務員、教員、会社員、医師、看護婦、学生、主婦）。A 300人の大合唱「森の歌」、B松方コレクション展、C文楽公演、D県民オペラ「フィガロの結婚」、E大分県美術百年展、F上杉謙信展、G県民オペラ「椿姫」、Hベートーベン生誕 200年記念演奏会、I 県民バレエ「白鳥の湖」、j 県民吹奏楽「交響楽新世界」、K 県民オペラ「蝶々夫人」、L創作オペラ「吉四六昇天」、M日本舞踊「春夏秋冬」、Nオリエント美術展、O海の正倉院「沖の島」宗像大社国宝展、Pその他の芸術祭参加行事、（A～Oまでは芸術祭中心行事）

ベストテンを次にあげると――

1　L創作オペラ「吉四六昇天」……29票
2　B松方コレクション展……25票
3　E大分県美術百年展……16票
4　I 県民バレエ「白鳥の湖」……15票
5　D県民オペラ「フィガロの結婚」……10票
6　O海の正倉院「沖の島」宗像大社国宝展……7票
6　G県民オペラ「椿姫」……7票
6　M日本舞踊「春夏秋冬」……7票
9　K県民オペラ「蝶々夫人」……5票
10　Nオリエント美術展……4票

Pに○印をした人はほとんどなかったが、書いた人にはその内容、名称などを記入してもらった。その中には沈んだ島の物語、短歌コンクール、俳句大会、県美展と書いた人もいた。(2)『印象に残っている理由』を書いてもらったが、答はその全部が〝鑑賞したから〟に○をしている。50人の中には白紙で返した人が４人いたがその人は鑑賞しなかったと答えていた。

また具体的に感想を記入した中で一部紹介すると、・地味な文芸部門に教育行政が共催の名で関与しはじめたということは敬すべきことである。・主役に一考を要する面あり（演技、声量、体格、顔、スタイル等）。・皆の真剣さが印象的。・松方コレクション展を除いては地域の特色が多分に表現されたものであったから。などがあった。最後に(3)『これからの県芸術祭に望むこと』を記入してもらった。この項には・県民が自由に使用される施設がほしい。・予算の少ない中で、このような催しはなみたいていのことではないと思うが、ますます発展することを祈る。・一般にも理解できるやさしい内容のものを望む。・盛りだくさんの内容も大へん結構ですが、県下一円に知られるようＰＲに創意工夫がほしい。・会場については便利のいいところを考慮してほしい。・県民全体が芸術祭に参加できるようお願いします。などがあったが、全体に関心が強く、建設的意見が多かった。

ニュース

県立芸術会館

県教委は７月22日に第３回の県立芸術会館建設委員会を開き裏川案の方針を打ち出し、さらに８月22日に開いた臨時教育委員会で態度を決め知事に意見具申した。

県立芸術会館の建設は、当初、県立美術博物館を建設するということでスタートしたが、昨年、芸術と博物を切り離すことが決まり、芸術会館を大分市に建てることで建設場所候補地を捜していた。これまで県立大分図書館北側の県警察会館、大分大学経済学部跡地、大手公園など大分城址公園周辺などと変転し最終的には裏川埋め立て地と大分工業高校の二か所に絞られていたもの。

芸術会館建設も、ふりかえれば41年第２回県芸術祭行事の一環である「松方コレクション展」の収益金 300万円を建設基金として県に寄付したことから具体的な動きとなってここまできたもので、県芸振会議や芸術祭とは非常に関係が深い。

芸術会館建設委員は、伊藤政雄（県総務部長）、稲田香苗（第一高女同窓会長）、上田保（県立美術博物館期成会長）、辛島武雄（県音楽協会長）、小長久子（県オペラ研究会長）、佐藤満雄（県土木部長）、辻英武（県芸振会副会長）、仲町謙吉（県美術協会事務局長）、三木福寿（大分市助役）、御手洗信夫（県議会文教委員長）、宮崎豊（県美術協会長）、宮瀬香多士（大分合同新聞文化部長）、米田貞一（県芸振会長）、幹事・松田研一（県総務部財政課長）、京極勝（県土木部建設課長）、近藤昌彦（県教育庁社会教育課長）、矢野朔雄（県教育庁文化課長）の各関係者で構成されている。

県立総合博物館（仮称）

一方県立総合博物館（仮称）の方はまだはっきりした見とおしが立っていない様であるが、昨年度から研究調査員を委嘱して、実際の研究調査が始まっている。文化課にも今年度から後藤主幹の下に総合博物館、芸術会館準備班として２名がその実務にあたっている。また昨年度研究調査した34ページにわたる報告書もでき、ことしはその上に立ってさらに研究調査を深めていく方針。昭和49年度の県立総合博物館（仮称）研究調査員は、考古・後藤宗俊（文化課）、岩本仁蔵（杵築高校）、歴史・佐藤満洋（佐賀関高校）、豊田寛三（大分大学）、民俗・小玉洋美（青山高校）、加藤泰信（舞鶴高校）、美術・菅久（ろう学校）、岡田三郎（大分大学）、地学・日高稔（上野丘高校）、臼杵卓三（舞鶴高校）、動物・佐藤真一（教育センター）、藤沢信一（野津中学校）、植物・荒金正憲（別府市教育委員会）、遠藤正喜（教育センター）の14名。

文化課の総合博物館・芸術会館準備班は主幹・後藤昭六、主任・小泊立矢、事務・三重野有美。

県民オペラ「吉四六昇天」東京公演案内

昨年県芸術祭の開幕を飾った県民オペラ「吉四六昇天」は本年度は共催行事として、アンコール公演を10月９日に実施、その後杵築、津久見市で巡回公演を行なった後、昭和50年１月26日新宿の郵便貯金ホールでの東京公演が実現する。これは在京県人会の方々のご努力の賜で、皇太子ご一家もご観覧になられる予定。

10周年記念　県美展の審査員が決まる

10周年記念県美展は11月５日から６日間、日・洋・彫・工展、12日から６日間写真展、19日から一週間書道展がそれぞれ開かれるが、日・洋・彫・工展には評論家の東野芳明氏が、写真展は二科会員の秋山庄太郎氏、書道展は日展審査員の松井如流氏が審査員として決まった。

また10周年を記念してこれまでに功績のあった、日本画の溝辺有巣、洋画の武藤完一、武田由平、宮川泰孝、書道の平田暘邨、森神紫陽、写真の糸井英雄の各氏を招き11月10日に感謝状ならびに記念品を贈呈することになっている。

展覧会の方でも各部とも10周年記念賞をそれぞれ出すが、書道部では特に１冊 1,000円程度の作品集もつくることになった。

「藻汐草」出版

著者　県美協書道部名誉会員・平田暘邨。

昭和39年から現在に至るまでの10年間大分合同新聞「灯欄」に執筆した随想をまとめたもの。

発行所　大分市太平寺３組豊池書道会

日本児童演劇協会賞

昨年に引きつづき鹿児島県内の小中学校を巡演中の造形劇場（野呂祐吉・大分県大野郡野津町亀甲）に対し今年度の日本児童演劇協会賞が贈られた。

芸振会議事務局増員

現在芸振会議の事務局は県教育庁文化課の文化係が主になって事務を行なっているが、６月から広瀬晴四郎氏（鶴崎中学教諭・県美協会員）に事務の一部をお願いすることになった。担当は調査と県文化年鑑の編集。

大分県芸術祭行事

		第1回（昭和40年）	第2回（昭和41年）	第3回（昭和42年）	第4回（昭和43年）
主催行事		県芸術祭記念音楽会 移動文化講座	松方コレクション展 移動文化講座 富永国立西洋美術館長美術講演会	文楽公演	県民オペラ「フィガロの結婚」 県美術百年展
共催（集中）行事	文芸				
	美術	共催（集中）行事は第6回からはじまるので5回まではない。			
	音楽				
	舞踊				
	演劇				
芸術祭受賞の行事および団体・個人	文芸	県歌人クラブ			
	美術	県美術協会		県宣伝美術協会	（特別賞）県美術協会
	音楽		県三曲協会 大分マンドリンクラブ		大分大学マンドリンクラブ （特別賞）オペラ 県音楽協会
	舞踊		県洋舞踊協会		
	演劇		県児童文化研究会		県人形劇サークル協議会
	総合			竹田市文化連盟 犬飼町文化会議	
	特別感謝状	藤沼恵（ウィステリアコール）			
文化団体サークル活動状況	県単位文化団体	14	14	14	14
	市町村単位文化団体	19	19	19	19
	その他の文化団体	24	26	26	27
	芸術祭参加団体	34	42	38	41

および受賞一覧

第 5 回 (昭和44年)	第 6 回 (昭和45年)	第 7 回 (昭和46年)	第 8 回 (昭和47年)	第 9 回 (昭和48年)
開会音楽会 天と地と「上杉謙信展」	ベートーベン生誕200年記念演奏会 県民オペラ「椿姫」	県民バレエ「白鳥の湖」	県民吹奏楽「交響曲新世界」 第Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ章	県民オペラ「吉四六昇天」
	県俳句大会 県芸術祭短歌コンクール 県川柳大会	県俳句大会 短歌コンクールおよび短歌を語る会 県川柳大会	第6回大分県俳句大会 県短歌コンクールおよび短歌を語る会 県川柳大会	第7回大分県俳句大会 県短歌コンクールと短歌を語る会 県川柳大会
			第8回県美術展覧会	第9回 県美術展覧会
	音楽の夕べ	音楽の夕べ 県民オペラ「カバレリヤルスティカーナ」	音楽の夕べ 県民オペラ「蝶々夫人」	音楽の夕べ
	民踊まつり	県民踊大会	バレエ	バレエ
	県演劇祭	県演劇祭	県演劇祭	県演劇祭
		県俳句連盟	県番傘川柳連合会	
		県現代美術動向展		
県職場音楽連盟 (特別賞 開会音楽 大分県音楽協会	県音楽協会		県吹奏楽連盟	(県民オペラ) 「吉四六昇天」
県日本舞踊連盟	県民踊連盟	県洋舞踊協会		(日本舞踊) 「春 夏 秋 冬」
劇団造形劇場	県高等学校文化連盟			「沈んだ島の物語」
豊後高田市文化協会		山香町文化連盟	佐伯市文化振興会	玖珠町文化振興会議 国東町文化協会
県美術協会 県児童文化協会 県洋舞踊協会	中 山 周 二 小 長 久 子 北 村 宏 通	粕 谷 辰 雄(バレエ) 桂 久 雄(オペラ)	ジェムスバーダル(吹奏楽) 福 田 五 彦(マンドリン) 大分合同新聞社(オリエント美術展)	特別感謝状 立川清登 特別功労賞 大分交響楽団 感謝状 (県民オペラ) 台本制作 阪田 寛夫 作曲担当 清水 修 声楽指導 横井 輝男
14	16	18	18	18
19	19	19	23	24
28	30	65	68	72
39	37	49	44	56

ある報告書から

近県博物館視察報告書

大分県立総合博物館（仮称）研究調査員・美術部門担当　菅　久
岡田三郎

昭和49年9月17日（火）～19日（木）3日間　佐賀県・長崎県

◎17日午後　佐賀県立博物館　（総合的な郷土博物館・資料展示）
佐賀県佐賀市城内1―15―23　電話 09522―4―3947

館長・大園弘、学芸課資料係長・尾形善郎の両氏に会い報告を受け館内を視察。

（館長はもと教育長）

- 受け取った資料は、佐賀県立博物館案内、佐賀県立博物館の事業計画（昭和49年度）、博物館報No.10、No.19、No.21
- 話し合った内容

博物館の管理上の問題点は盗難と火災であるが、その点当館は敷地が広いので外部からの火災の危険がない。盗難についても24時間人がいる様になっている。（ガードマンが警備にあたっている）しかし、館外までは手が行きとどかないので野外彫刻展などやりたいが管理上の点で今まで開催していない。

館員は定員19名、（館長、副館長各1、総務課9、学芸課8）総務課の中には守衛2、ボイラー、電気1が含まれている。定員外に非常勤の専門家が3名いる。

この館は45年に開館したがコケラ落しに「桃山、江戸美術名作展」を館の企画で開催した。その後企画展を毎年数回開催しているが、ことしは11の企画展を計画実施中である。これは少し多すぎる。館自体の企画展は年4回内至2回が適当と思う。

企画展以外の時は「佐賀県の歴史と文化展」を常設しているが、この展示は、総合歴史的なものでなく、部門別に陳列している。

（自然史資料、考古資料、歴史資料、美術工芸資料）佐賀県の場合中世のモノが少ないので、中世のモノを集めたいと思っているが、現在は穴である。

全館使用の企画展は毎年9月から11月の3か月行い、その期間は常設展示をひっこめる。全館を使うのは県美展をはじめ外部から引いた大きな展覧会で、今までに中央の公募団体展を引いたのは院展、独立、日展、東光展などである。

小さな企画展の時は二つから三つを同時に開催することができる。ただしこの館で個展はやらせない。地理的にも市街中心部から少し離れているし、この館で作品を売ったりするのは困る。デパートや画廊でしてもらう。しかし遺作展のようなものは開くことがある。

県美展の開催については、県と文化団体協議会、県美協の三者が共催であるが、県の文化課が主になって日・洋・彫・工・書・写・デザインの7部門を同時に開催している。

9月から11月の企画展開催中には県内で移動博物館を3～4か所で開いている。主に歴史、考古であるが、評判がよい。

問題点は常設展、企画展の併用のむずかしさ。

建物の構造の点で一階が一番せまく、二階、三階になるにしたがって広くなっている。湿度と盗難防止のために考えられたことだが、展示場と収蔵庫が三階にあって不便。

この館は独立にも使える。つないでも、分離しても、総合でも使える。入口が四つあるので多角的に使えるが、かえって問題　（大分県芸術会館の場合も美術、音楽、演劇、オペラなど兼用建物と聞くがよくない）。

学芸員を一人でも多くとること。神奈川は25～26人いる。宮崎も多い。

企画展は2年前から考えること。1年前から調査費をつけること。

収蔵庫はなるべく広く、はじめから中に廊下やタナなど計画的に造っておくこと、未整理を置く倉庫を別に造ること。

館にある資料を中心に学校教育との関連を考えること。

階段が急だと年よりは無理。身障者のための通路を。

電源、コンセントの位置をよく考える。床は線を入れると便利。

保存関係要員が一人はいる。学芸部は部門別最低2人以上、また学芸員の部門別の部屋が必要。

◎18日午前　有田陶磁美術館　（陶磁器の資料展示）
佐賀県西浦郡有田町3区
有田商工会議所構内

館長・館林重夫(町教育委員長)氏に会い報告を受け館内見学。

- 資料なし
- 話し合った内容

この館は昔の陶磁器の倉庫を美術館にした古い石造二階、現在では別に有田国際陶芸美術館の計画がある。見学者は年間2500人程度でそのほとんどは5月1日～5日の有田陶器市の期間である。日頃は訪れる人も

あまりなく、外人が多い。

◎18日午後　長崎市立博物館（貿易、キリシタン等の資料収蔵）

長崎県長崎市平野町17―８　電話0958―44―0990

館長・越中哲也、次長・岸本寛夫の両氏に会い報告を受け館内を視察。（館長は学芸員で文化財専門委員）

- 受け取った資料は、長崎市立博物館パンフレット、長崎市立博物館報第９号、第14号、趣味の茶道具展目録、市民大茶茶記、亀山焼と長崎古南画展出品目録。
- 話し合った内容

現在の館、国際文化会館は２、３階が原爆資料館、４、５階を博物館として使用している。収蔵庫は地下の一部を使用、約２万点の資料を整理保存している。日本の博物館の中で最も古いのが東京国立博物館と長崎市立博物館である。収蔵作品は主に長崎系絵画、中国と長崎関係資料、オランダと長崎関係資料、長崎の古文書類など、主に古美術。

現在博物館の構造などで一番の権威者は北海道にいる倉田公裕氏、この人をつかまえて聞くとよい。いろいろな美術館を手がけている。また東京国立博物館普及室にいる長谷川栄氏がくわしい。

まず考え方として、①独立博物館にするのか、総合にするのか。②何を収蔵するかによって展示がかわる。③実際に収蔵可能かどうか、一億か二億では何も買えない。④収蔵品がなければはじめから貸展示館にした方がよい。⑤博物館も商売であることを忘れてはならない。金の額ではなく、人を入れることを忘れてはならない。⑥対象をどこにおくかによって性格がかわってくる。

ギャラリーにした場合日本画をどうするか、ガラスケースは山種美術館形式がよい。電気も山種がよい。佐賀は軸の大きなものが掛けられない。日本画はあまり明るくてはアラが見える。

監視人をどこに置くか、これからはカメラが会場を監視する。

床は音がしない様にジュウタンにした方がよいが消耗率が高い。

付属図書館をつくること。写真撮影室をつくること。荷とき場を広く、荷物運搬と一般を別にしてエレベーターを、搬出入のエレベーターは 150号大を、屋根から作品をつり上げるリフトは風向きと窓を考えること。

整理のための倉庫や、盗難予防をどうするか、倉敷、大阪天王子、京都など大きなところや盗難に会ったところはよくしている。しかし教えない。

先ず館を建てようとする場合、設計者にまかせないこと。設計する前によく話し合う。設計してしまえばほとんど変更することはできない。トイレ一つにしても大切である。展示場はどのくらい歩いたら疲れるか、途中にサロンをつくるとよい。「山種」や「出光」は途中で茶室をつくっている。最初から最後まで一気に歩かせる展示構造はダメである。余裕のある構造にすること。長崎県立の館構造は失敗である。この様な研究は全国博物館会議に加入しその中にある全国美術館会議に出席すれば研究ができる。事務局は鎌倉近代美術館にある。まだ美術館のできていないところでも加入できるのでぜひ入会するように、とのことであった。

◎19日午前　長崎県立美術博物館

（古美術、現代美術の資料の展覧）

長崎県長崎市立山町２　電話0958―22―6700

次長・山川澄哉、総務課・寺島秀一両氏に会い報告を受け館内を視察。（館長はもと県議会議員）

- 受け取った資料　長崎県立美術博物館パンフレット、長崎県立美術博物館年報、美術博物館関係法規集。
- 話し合った内容

長崎の県立は美術館の色彩が強いが総合博物館にする努力をしている。館の構造上常設展ができない。大展示場一つに小展示場一つあるが小展示場は小さな個展程度しかできない。展示場はぜひ複数にすることである。年間に企画展を６～８開催する。10月12日～11月１日までスペイン美術展を開くが、これは元外交官の須磨氏のコレクション 104点の寄贈を受けたので４か年かかって補修しこのたび補修完了記念として開かれるもの。補修費は 1,000万円かかった。作品は12、13世紀から現代までのスペイン美術・補修費は特別のもの以外に年間15万組んでいる。

新築・増築・改造
その他一般工事
設計・施工
中三建設
代表者 中野三平
大分市南春日町13組　TEL㊸4820

当館の収蔵品は長崎港関係のスペイン、ポルトガル、中国もののほか古画から現代まで約 600点ある。考古資料を含めると 1,000点以上ある。博物館や美術館を建てる場合収蔵品があって建物を建てるのが本当である。

各地方に博物館や美術館がいろいろあるが特色のないものが多い。長崎の場合キリシタン関係があるが大分県には何があるか？美術史上有名な人の作品を集めるのは中央でもできる。熊本はこの点について苦労している。目下装飾古墳を中心に考えているらしい。

長崎はこの美術博物館を10年前に建てたが、１億少しで建った。これからは10億単位である。

九州博物館会議があるが、大分県では杉の井美術館だけが加入している。これから建てようとするところも加入した方がよい。日本博物館会議、全国美術館会議など、熊本県は準備段階から加入している。

建物を多目的に造るのは失敗する。当館も講堂があるが展示場と兼ねて使用しているが失敗であった。

企画展の中で絵画展が一番入場者が多い、考古は全然入らない。

当館は友の会活動が活発である。友の会は会費の中から専任の職員を一人おいている。会員が 800人いる。内容は実技講座、（日本画、洋画、書道、焼物、）と考古、美術史講座、県内外の史跡めぐりなど、会費年間 2,000円。実技などの経費は別。焼物の場合小屋、窯は県費で造った。

友の会では定期観覧券をつくって、どの展覧会でも３分の１で鑑賞できる。会員の８割以上は女性で知識欲旺盛である。つい最近も定員40名で東北旅行に行った。「美博だより」の中に友の会のニュースを出す。

「美博だより」は５、７、９、11月に発行、４ページ。

学芸員は現在４名だが、10名は必要。10月15、16日に九州博物館会議を長崎ですることになっている。

この館の裏に、もと理科教育センター（鉄筋２階約10教室）が空屋になっているので、この建物を利用して階下は考古、民具などの収蔵庫とし、階上を友の会の教室として使用している。

これからの美術博物館は展覧会と同時に社会教育的な友の会の活動が非常に大事であると強調。

◎所　感

四つの館を回って特に感じたことは、①設計にはいる前に十分調査研究すること。②調査、研究は机上ではダメで一つでも多くの美術館、博物館を見ることと、全国博物館会議や、美術館会議に早急に加入して情報を得ること。③総合か専門かを早く決めることだが、歴史的系統的な理想展示はなかなかできない。④多目的の美術館、博物館は失敗する。⑤収蔵品がないのに建物ばかりを考えても無駄である。⑥カッコイイ建物よりも使える建物を。⑦特に収蔵庫や倉庫、荷とき場、搬出入場所など見えないところを十分考えておくこと。⑧学芸員の定員を１名でも多くとること。⑨収蔵購入費や補修費などを十分にとること。⑩大分県の場合美術館、博物館として〝何を特色づけるか〟を早くきめること。

・話題に出た人と美術館

倉　田　公　裕　札幌市中央区南[redacted]
〈美術評論家連盟会員〉（北海道教育委員会・北海道立美術館建設準備室）

長谷川　栄　浦和市元町[redacted]
〈美術評論家連盟会員〉（東京国立博物館 822—1111）

サントリー美術館　東京都千代田区丸の内１—１—１パレスビル　〒 100　電話03— 211—6936
（生活に密着した日本の古美術）

出光美術館　東京都千代田区丸の内３—１—１　電話03— 213—3111
（仙厓の書画・陶磁収集は有名）

山種美術館　東京都中央区日本橋兜町２—30　電話03— 669—4056
（日本画専門の展示で特異な存在）

神奈川県立近代美術館　神奈川県鎌倉市雪の下２—１—１　電話0467—22—5000
（現代彫刻の収集に特色がある）

・全国美術館会議は昭和27年に設立し、日本全国89館の参加によって構成され、毎年１回例会を開催し、日本の美術館のもつ諸問題を研究しつつ質的向上をはかり、かねて親睦的意味をもつ全国的機関である。

会長　土方定一（神奈川県立近代美術館長）